

蒲生慶一先生を追悼する小さな特集にあたって

大川 正彦
OKAWA Masahiko

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.24 (2022), pp.13–14.

「大川さん、蒲生です。覚えてますか？」そんな再会でした。2001年4月のこと。研究室にいたところ、ドアを叩く音があり、蒲生慶一先生（以下、蒲生さん、とお呼びします）が訪ねて来てくださったのです。再会というのはほかでもありません、1991年にわたしが都の杜の博士後期課程に進学し、一橋大学大学院経済学研究科で開かれていた、川本隆史講師（当時、跡見女子学園大学）の「正義論」ゼミに二セ学生として参加したところ、そこで一橋の修士課程に入りたての蒲生さんと出会い、同じゼミ生として過ごしたことがあったからです。このゼミには、「正義論」の大家、一橋大学の塩野谷祐一先生、森村進先生のほか、鈴木興太郎門下の院生、吉原直毅さん、後藤玲子さんなども参加されていました。

再会以来、学内では、「同門」の誼に甘えて、ほんとうにお世話になりました。面倒なことは一切合財引き受けていただいたといってもいいすぎではないかもしれません。外国語学部当時、二人で「地域国際研究総論：福祉国家論」なる授業をやったこともありました。隔週交代で講義し、授業の冒頭では前回の――蒲生さんはわたしの、わたしは蒲生さんの――講義内容についてツッコミを入れて議論をするということを履修者そっちのけでやってもいました。また、ときには大学院志望の蒲生ゼミ生と机を並べて、原書講読もやりました。こうやって、わたしは蒲生さんと勉強する愉しみを密かに手にし

ておりました。それもこれも、あの一橋での解放的な雰囲気の中での学問談義のつづきのつもりだったのかもしれませんが。

このことに輪をかけているとおもわれるのは、蒲生さんが横国の経済で、わたしの先輩・齋藤純一さんの社会思想史の授業を受けていた、ということ、外大で同僚になってから知ったからでもあるのでしょうか。さらには、あの80年代末から90年代初頭にかけての時間を大学院生として過ごした、という感傷を蒲生さんに一方的に仮託していたのかもしれませんが。

そんな親しいお付き合いをさせていただきながら、真剣な学問討議を交わしたことはついぞなかったし、ゼミ生同士の交流を設けることもしませんでした。できの悪い学生として、もっとしごいてもらえばよかった、といまさらながら振り返ります。

蒲生さんが昨年3月に急逝されてからまっさきにおこなったのは、蒲生ゼミの卒業生に訃報をお知らせすることでした。さまざまな伝手をたどって、数人、また数人と増えてゆき、蒲生ゼミの卒業生全体の数からすればごくわずかでしかありませんが、そんな風にしてかかわってきてくださったかたがたがいます。

生前の蒲生さんがそのようなゼミ生に見せた顔をわたしはほとんど知りません。しかし、わたしはわたしで、ゼミ生に対して、蒲生さんにはこんな一面もあるよ、ということをお伝えしたい、と思いました。そのため、この小さな特



蒲生慶一先生を追悼する小さな特集にあたって

集では、学内の先生はもちろんのこと、学生・院生時代の“蒲生先生”のことを知るかたがたにもお声がけして、追悼の文章を寄せていただくことにしました。お寄せいただいた方々には、深く感謝のことばを申しあげるばかりです。ありがとうございました。

昨年末、ある卒業生からのメールにありました。このあいだも、のそりのそりと夢に出てくるから、まだ信じられないんですよ、と。残念ながら、わたしの夢には出て来てくれいていません。いつか、どこかで、「地域国際研究総論」のつづきをやりますか、蒲生さん。そのときまで、さようなら。どうか、安らかにお眠りください。